

ケアの視点から新しい社会のあり方を考える

企画者 佐藤修（株式会社コンセプトワークショップ）

発題者 池川清子（日本赤十字看護大学看護学部）*

櫻田周三（慶応義塾大学総合政策学部）

2001 年 11 月 24 日（祝金） 16:00 - 18:30

千葉県木更津・かずさアカデミアパークにて

今年、コミュニティケア活動支援センターというのを立ち上げました。全国のコミュニティケア関係の市民活動を支援しながら、相互に支援し合える関係を育てていこうという試みです。それに隣接して、インキュベーションハウスという社会的起業家のたまり場をつくりました。ワーカーズコレクティブ方式の会社です。さらにそれと並行して、コモンズ村を育てようと思っています。これは流行のエコマネーにちょっと似ているかもしれません。

このセッションでは、この3つの仕組みを題材に、新しい社会のあり方や働きの方を考えていきたいと思っています。そしてできれば、大きな福祉ということも考えたいと思っています。

佐藤 株式会社コンセプトワークショップの佐藤です。2日間最後のプログラムなのでたいへんお疲れではないかと思いますが、幸いにテーマがケア、つまり気づかいをしようということで、このセッションは気楽に進めたいと思っています。どうぞ気楽にお付き合いください。

さきほど、構想は実践しなければならぬという話がありましたが、私が取り組んでいること、取り組もうとしていることをお話させていただいて、そこからディスカッションに入らせていただけたらと考えています。

二人の発題者、というよりもゲストといったほうがふさわしいのですが、お越しいただいております。まずは池川さんです。今日お話しするケアという言葉に私が最初に出会ったのが、池川さんの『看護』という本です。5年くらい前になるでしょうか、この本を読んでいただく感動いたしました。実は池川さんにお会いするのは私にとっては、今日が初めてです。まさに私にとっても大変うれしいゲストでありまして、ゲストという立場であぶなっかしい私の発言を是正していただく役割をお願いしたいと思います。

それから、もうひとかたはこれからお話するプログラムに関わってくださっている、櫻田さんです。私が頼りないのでちゃんと付き添いに来ていただいたのですが、櫻田さんも様々な活動に関わられていますので、思いが先行しがちな私の発言を是正してもらえと思っています。

今日のテーマは、「ケアの視点から新しい社会のありかたを考える」という極めて大仰なテーマです。副題に「みんなが輝くコミュニティ」と書いておきましたが、どうなりますか心配です。まずは私の自己紹介から始めます。

私は15年前まで民間企業におりました。ちょうど25年間勤めました。昨日のテーマにありました企業のアイデンティティ（CI）を考えると、この仕事は最後の仕事でした。CIの仕事に取り組んでいるうちに、自分のアイデンティティの問題に行き当たってしまいました。そのCIの仕事が完了するのが、ちょうど入社して25年目だったので。とてもいい節目でしたので、社会に出て最初の四半世紀は組織人としてやってきた、次の四半世紀は自分のアイデンティティを探しながら、少しちがった生き方をしたいと思ひまして、

* 現所属 神戸市立看護大学

会社を辞めてしまいました。

辞めた翌日に参加したのが自分の住んでいるまちで始まっていた住民活動でした。そこでカルチャーショックを受けました。いかに自分が社会人ではなくて会社人だったかということを感じさせられたのです。それを契機として、北は青森から南は沖縄まで友人の細いつてを使いながら、各地の住民活動などに関わらせていただきました。会社を辞めて2年くらいいたら、次の仕事が見つかるだろうと思っていたのですが、その2年間でとても刺激的だったもので、仕事探しどころではなくなり、今もってほぼその延長線上で生きています。

会社を辞めて、いろいろなことに関わって感じたことがたくさんあります。そのひとつが、どうも世の中から「みんなのもの」が消えているのではないかということです。みんなのものというのは分かりにくいかもしれませんが、世の中のさまざまなものが誰かのものになってしまっている。あるいは、自分たちの手の届かない公とか官のものになってしまっている。

例えば、河川敷が荒れ放題になっている。死にそうな鎮守の森もある。聞いてみると「ここは国のモノだから誰も入れないんだ」とかいわれるわけです。「公共のもの」だから誰も入れないんだという非常におかしな話が少なくない。公共のものというのは一体だれのものなのか。市街地の真ん中にもそんな土地がある。

昔は、入会地とか入会山というものがありまして、ある集落の後ろにはみんなが使える森や土地があった。そういうものが誰かのものになるか、国や県のもの、そこに住んでいる人から言えば、結局誰のものでもないものになってきてしまっている。これは何かおかしいわけです。企業もそうです。私が会社に入った頃は、まだ「自分たちの会社」という実感があった。しかし最近の企業は、経営者とか株主のものとはいいませんが、何か社員一人ひとりとのつながりが切れているという感じが強い。地域も組織も、どんどん自分とのつながりが見えなくなってきてしまっている。知らない世界に取り囲まれてきている不安があります。

昨日から繰り返し身土不二の話が出ていましたが、土とのつながりとか現実世界とのつながりというのがどうも希薄になって、まさに私たちは

バーチャルな世界にいるのではないかという感じが強い。会社を離れて地域と関わりだして一番強く感じたのが、そういうことでした。

まちづくりで大切なのは住民エゴを捨てた市民意識を持つことだと、盛んにいわれているのですが、これにも疑問に感じるようになりました。市民というのは、なにか土から離れた賢い人という感じがしますが、今大切なのは土との生々しいつながりを持った住民感覚ではないか。住民エゴというのは、そうした生き生きした生活の証なのではないか。安直に切り捨てていいものだろうかという思いが強まりました。もう少し広くいえば、私たちは現実世界とのつながりというのをもう一度見直していく必要があるのではないかなというふうに考えるようになったのです。

最近、心のつながりというのがどんどん希薄になってきているといわれますが、これもこうしたみんなのものがなくなってきているということ、さらに言えば、土とのつながりが切れたということに大きな理由があるのかもしれませんが。

土を媒介としてつながっていたはずの、人と人とのつながりというものがなくなってきている。地域社会だけに限りません。組織においても同様な状況がある。同じ職場で働いていながら、となりの人とのやり取りまでもが今やメールで行われている、共通のリアルな土壌がなくなってしまったために、face to face、つまり心のつながりというものがなくなってきているのではないか。

人とモノとのつながりも同じです。住宅の中にはモノがあふれているのに、子どもたちに残したいというような愛着のあるモノがあるかといえば、ほとんどない。モノへの気遣いはもとより、それを通した人と人とのふれあいなども生まれにくい。

人と自然のつながりもなくなっている。さきほどのセッションの話ではありませんが、心身とのつながりもなくなってきているのではないか。みんなものというものをみんなであらためてつくっていく、コラボレーションしていくということが私のやりたいことだなということに気づいたのです。

そこで、「コモンズの共創」「コモンズの回復」をテーマにすることにしました。コモンズというのは自分たちのまち、自分たちの会社や組織、自分たちの社会、とかなり広義に捉えています。自

分たちと言っている以上、まちとか会社とか社会を構成していくためのメンバーとしての主体性、自立性、あるいは主役性というのが、とても大切になってくる。それが失われたということが、現在の最大の問題ではないかと思うのです。

物質的には豊かでも、心のつながりが消えているために、どうも豊かさを実感できないというのが今の状況ではないかと思えます。昨日から不況という言葉がちらちら出でいますが、今の日本のどこが不況なのかというのも私の実感です。正月のデパートに行くと、何が入っているかわからない、おそらくごみになるだろうものがつまこまれた福袋を競ってみんな買いこんでいる。そういう生活が展開されている今の日本が不況であるはずがないと私は思っています。私の友人にリストラされて困っている友人もいるのですが、ちょっと価値観を変えれば、今の日本では世界の平均水準よりも非常に高い生活がおくれるはずですよ。

私はもっと経済活動はレベルダウンしてもいいと思っていますが、それほどの経済水準であるにもかかわらず、みんなが満足感を持っていないというのは非常に大きな問題です。どこかが間違っているとしか思えない。

数年前にある研究所が、私たちの子どもたちの世代は私たちより幸せになるだろうかという調査をしました。みなさんはどう思いますか。私たちの子どもや孫の世代が幸せになるとお思いのかたは、手を上げていただきませんか。3人ですか。この質問を企業人にするとほとんど手が挙がりません。この調査の結果はどうだったかと言いますと、イエスと答えた人は2割でした。つまり、将来は今よりも悪くなっていくと思っている人が8割もいるということは、非常に問題ですね。

別の調査ですが、同じ質問を子どもたちにしたところ、子どもたちも同じように2割しかイエスと言わなかったそうです。これはたいへん大きな問題ではないかなと思います。

7年くらい前に、フランスの社会学者のジャン・ボードリヤールが日本にやって来て、「日本が豊かなのは日本人が貧しいからかもしれない」と言ったんです。たしかに東京は豊かですし、日本の経済はまだ元気を残していた。しかし、経済大国と言われる日本でもそこに住んでいる人たちの生活というのは本当に豊かなのかどうかということはいへん疑問です。そういうことをジャン・

ボードリヤールが言ったわけです。

私は豊かさに関する考え方が2つあると思うのです。ひとつは、国が、あるいは全体が豊かになって初めて個人が豊かになるという考え方です。日本は今までこの考え方でやって来ました。そして、見事にこれに成功した。企業の業績を発展させるために企業人は自分の生活を犠牲にして、時には過労死までして一生懸命つくした。そして、企業の業績があがり、その結果、多少の犠牲者はいましたが、まちがいなく私たちの生活は豊かになりました。

この豊かさモデルが10年前くらいから、どうもうまくいかなくなってきた。会社全体から発想しているだけでは、会社は元気になっていかない。そういうことに一部の企業は気づき始めた。

国が、組織、全体、会社がとってもいいと思えますが、ともかくこれまでの日本の豊かさの発想は、まず全体から発想するというものでした。全体を豊かにするために、個人は犠牲になろう。そして全体が豊かになったら、成果をみんなに分けて個人個人が豊かになっていくんだというモデルだったと思います。ところが、ジャン・ボードリヤールのフランスは発想が逆なのですね。一人ひとりが豊かになって初めて国が、全体が豊かといえるんだという発想です。これは非常に大きなちがいです。全体から発想するか個人から発想するか、とても大切な問題です。そして今の日本社会は、日本が持っていた豊かさモデルというのがそろそろ限界に来ていて、もうひとつの豊かさモデルに移って行かなければいけなくなってきた。

そういう視点でもう一度あらためて考えますと、主役はいったい誰なのか、組織なのか全体なのか個人なのかという問題が出てきます。例えば、会社と社員の関係がわかりやすいと思えますが、われわれは自分の生活を豊かにするために会社に入るわけですが、気がついたら自分の生活を犠牲にして会社の業績を上げようとしている。まさに論理矛盾ですね。

会社というのは、私たちがつくった仕組みですね。ひとりではできないことをみんなで集まってやろうというためにつくった仕組みです。本来は、個人一人ひとりが使い込んでいかなければならない仕組みや装置だったはずなのに、その会社に使われる存在になってしまっている。つまり、会社

が主役になっていた。同じことがもしかしたら、地域社会にも大学にもあるかもしれない。もう一度あらためて、そのメンバーが自分は主役である、組織を使い込むべき主役であるという意識を持たなければいけないのではないかなと思います。

一部の会社では、ようやくこういう動きがはじめてきている。一人ひとりの社員を元気づけなければ会社は発展しない。メンバーを管理するのではなくてエンパワーする、つまり元気づけるという方向になってきた。いま元気な会社は、まさに社員一人ひとりを主役にさせようという方向にきている。組織とメンバー、地域社会と住民という関係も、同じようなことがいえます。

行政ががんばったために、壊れた地域社会というものはたくさんあります。そうではなくて、一人ひとりが主役意識を持って地域社会をつくっていきこうという動きが広がり始めている。この前におこなわれたセッションに関して、同じようなことがいえるわけですね。患者一人ひとりが意識を変えなければ病院が良くなるはずがない。もちろんお医者さんが、看護婦さんが良くなければということも大切です。いずれにしろ、そこに関わる一人ひとりが変わらなければ、組織や社会は変わっていかないという意識はかなり広がってきているように思います。

組織は人間がつくった仕組み、その人間がもう一度あらためて主役性を取り戻さなければいけない。そのようなことをいろんなことに関わりながら感じてきて、さまざまな分野で、コモنزの回復に向けての取り組みに関わっているのです。

例えば、まちづくりという分野でいえば、山形市で共創プロジェクトというのをやっています。行政職員と住民たちが一緒になって対立したり依存したりするのではなく、一緒になってまちの課題に取り組んでいきこうというプロジェクトです。そのなかで、住民たちが自発的に集まってまちづくりに取り組んでいきこうということになれば、まちづくり市民会議というかたちで登録し、その活動を行政が支援していくというような活動です。

あるいは茨城県の美野里町というところで、まさに住民主役のまちづくりをやっています。文化センターを住民が主役になって設計していく（もちろん専門家の力を借りながらですが）。そこで

演じるミュージカルを住民たちが自発的に劇団を組織し、専門家の指導を受けてシナリオづくりから公演までやってしまう。その勢いによって、総合計画とか都市計画マスタープランというもので、外部のコンサルタントを使いながら、自分たちでつくろうという動きもでてきた。

そういう、住民参加を超えた住民主役のまちづくりというものが始まりでした。私もそうした動きにいまのめり込んでいます。

企業変革でいえば、従業員たち自身が自分たちの会社をよくしようと本気で取り組みだす運動がはじめています。顧客と開発者が一緒になって自分たちの新しい事業を開発していきこうという動きもある。

そういう、みんなの知恵とか汗を出し合う仕組みづくりや活動というものに取り組んできたのですが、私も今年、還暦になりまして、そろそろ何かかたちをつくりたいなというふうに思い出したのです。そこでやりだしたのが、今日お話しする3つの仕組みです。この3つの仕組みを簡単に紹介して、ディスカッションの材料にさせていただきたいと思います。

ひとつは、コミュニティケア活動支援センターというプログラムです。これは、ゲストの櫻田さんにも参加してもらっていますが、今年の8月に立ち上げました。ある会社が、福祉系のNPOや市民活動グループに対して資金助成をしたいので、その事務局をやってくれないかという相談があったのですが、それを契機に立ち上げたのがこのセンターです。出発点は資金助成です。その募集要項をお配りしましたが、単なる資金助成作業の事務局ではなく、コモنزの回復につながる仕組みづくりを構想しています。

私もいくつかのNPOやボランティア活動に関わっていますから、市民活動にとってのお金の効用ということはわかっていますが、その反面、資金助成には怖さもあるわけで、いろいろ問題がある。そこでせつかくならば、資金助成だけではなくて、コミュニティケアに関してみんなで助け合うような仕組みをつくりたいと思って、その活動拠点としてコミュニティケア活動支援センターをつくったのです。

では、コミュニティケアというのは何か。日本ではケアというと介護とか狭い意味での福祉と捉えられがちですが、私自身はケアというも

のを、非常に大きな広がりをもったものとして捉えています。この点については、池川さんから後ほどご意見をいただきたいと思います。

take care of という英語の care。これが私にとって最初に出会ったケアという言葉です。おそらく皆さんも同じではないでしょうか。要するに、ちょっと気にする、関心をもつ、ちょっと世話をする、あるいは気にしあうという意味合いです。それも誰かが一方的にケアするというのではなく、ある種の関係性といいますか、お互いにケアをしあう、気づかいあう関係というのが、私のケアに対する理解です。

コミュニティという言葉も難しい言葉ですが、私は「お互いに重荷を背負い合う関係の集まり」ではないかと思っています。

ケアとコミュニティ。この二つこそ、今の私たちが失ってきている関係性ではないのか。つまり、それこそが私のテーマであるコモンズの回復の核心となる言葉です。

そこで、気づかいあう社会づくりに向けての活動であれば、それはすべてコミュニティケア活動であるという定義をしました。大きな福祉とも言っているのですが、とにかくそうした活動がお互いにつながりあう仕組みをつくっていききたい。そう考えて、全国の市民活動グループに資金助成の募集と相互支援の輪作りへの参加を呼びかけました。

結局、269 件の応募があり、20 数件ほどに資金助成をしたのですが、資金助成の対象になったかどうかとは無関係に、すべての応募団体に対して、とにかく問題があったらなんでも相談に乗りますと宣言しました。もちろんなんでも相談に乗れるわけではない。センターの実体は、私と何人かの若者たち、しかもほとんどがボランティアなメンバーだけなのです。フルコミットしている人はいない。ですから、なんにでも対応できるどころか、ほとんど対応できないのです。でも宣言してしまったのです。

そこで仕組みとして、応募した人はみんな支援されるだけでなく、支援する側にも回りましょう。つまり、支援する人と支援される人という関係はもうそろそろやめましょうと呼びかけたのです。お互いに、時には支援し、時には支援される。そういう関係をつくりましょうというわけです。同時に、問題解決型とか一方的に援助する

のではなくて、集まった人たちがみんな新しい価値をつくりだしていく価値創造型の関係をつくることを目指したいと呼びかけました。

何かやるときにはお金が必要だと私たちは思いがちですけれども、お金がなくともできることはたくさんあります。もちろんお金の効用はありますが、私たちはそれに依存しすぎているのではないか。とにかく、支援や資金に依存している状態から脱却しましょうというのが、このコミュニティケア活動支援センターのメッセージなのです。

いま、東京の本郷に小さなオフィスをつくって活動しています。将来はここにコミュニティケアに取り組んでいる人たち、気づかいあいのある社会づくりに関心を持った人たちのたまり場をつくりたいと思っています。これは今始めたばかりでして、いつまで続くのかもいささか不安はありますが、今は元気にやっています。

資金助成先の選考も新しい方法を採用しました。募集数が 269 件でしたが、様々な生活者の目から予備選考を行い、30 件ほどに絞りました。そして、その方々に公開の場で発表してもらい、みんなでお互いに投票してもらったんです。最終選考には残らなかったけれども、この方法に賛同してくれた人にも声をかけて、結局 50 団体ぐらいの人が集まりました。それから一般の人 20 人くらいにも投票権を持ってもらい、総計 70 人くらいの投票者の前で、30 団体の人たちに各 3 分のプレゼンテーションをしてもらいました。そして、プレゼンテーションした本人も含めて、全員で投票して助成先を決めたのです。公開された透明の場の中で決めていくと同時に、いろいろなものが発表されますから、学びあいの場にもなっていったのです。さらに、応募した人すべてのノウハウや思いを学びあいの材料にしたいと思っておりまして、応募された団体の了解を得てですけれども、応募されたプロジェクトの内容とか活動とかをホームページで公開していきたいと思っています。またメーリングリストなどやサロンも行って、お互いの学びあいや助け合いのネットを広げていく予定です。

これが、いま踏み出したプロジェクトのひとつです。ところが、コミュニティケア活動支援センターのためにオフィスを借りたのですが、なんと東京のせいか諸経費を含め年間約 400 万円以上

かかるのです。これはとてもこのプロジェクトでは対応できない。

そこで、ふたつめの仕組みが出てきます。インキュベーションハウスです。これはワーカーズコレクティブ方式の働き場としての有限会社をつくらうという構想です。まだ実際には成立していませんが、参加者がほぼ集まってまもなく設立で切る見通しです。すでに実体的には動き出しています。

ワーカーズコレクティブというのは、一言で言えば協同組合のことです。働く人たちが集まって自分たちで資金を出し合い、自分たちで会社を創り、自分たちで納得できる役割分担の中で働き、その成果も自分たちで配分するという仕組みです。全員が、資本家と経営者と労働者を兼務している、新しい働きかたです。

具体的には、参加者1人がそれぞれ30万円づつお金を出し合い、それを資金にしてインキュベーションハウス有限会社という会社を設立することにしています。そして自分たちで何をやるか決めていこう。それぞれが関わり方も自由に決めながら、仕事を創出し消化し、その働きに応じて、成果を配分していこう。そして全てを公開性の中でやっていこうという仕組みです。

いまの会社が元気になれないでいる理由の一つは、会社で働くことに対する喜びというのが非常に薄れていることです。これは問題です。働くことに対する喜びというのをもう一度回復しなければならぬという思いをずっと持っていました。そのためには、働くことの主役にならなければならない。その仕組みのひとつが、ワーカーズコレクティブ方式です。みんながお金を出して、みんなが経営に参加して、みんなが仕事を決めて、その成果をみんなで分かち合うというのがいいのではないかということで取り組んだのが、このインキュベーションハウス構想です。

私たちは、働くとか仕事をするという、つまり雇用というふうな考えがちですね。どこかの組織に雇われることが労働であるというわけです。これがこれまでの文化だった。ところがこの数年間のあいだに、それが少しずつ変わってきました。つまり、会社に入らずに、自分たちで会社を起こすのだという若い人が増えてきました。あるいは、リストラや定年退職者でやめた人たちが自分たちの会社をつくらうという動きもいま全国

的に広がっています。つまり労働ということや働くということ、仕事をするということは雇用とイコールだった時代が長かったのですが、いままた、自分たちで仕事をつくっていこうという、協同労働という概念が、雇用労働と並んで広がっています。

昨日 NPO の話がありましたが、NPO 法案というのが市民立法の第1号ですが、第2号として協同労働の法制化というのが進められています。そうした動きに私自身も共感していますので、私のまわりにいる若者たちと一緒にぜひそうした場を実現したいと思ったわけです。まさに実践しなければ構想も知識も生きてきません。

このインキュベーションハウスで実現していききたい事業というのは、単にお金が儲かればいいという仕事ではありません。みんな納得できる仕事がしたいという思いがありますから、社会的に新しい価値を生み出すような社会的事業というものをごそこでは展開していきたい。そういう意味でいえば、コミュニティビジネスという概念につながっていきます。コミュニティビジネスとは、地域の問題を解決するための小さなビジネスということです。私は「住民の住民による住民のためのビジネス」と定義しているのですが、そのような本当に地に足を付けたコミュニティビジネスというものに取り組んでいきたいと思っています。まさに先ほどお話したコミュニティケア活動につながっていくのです。

櫻田さんはコミュニティビジネスにたいへん関心をお持ちですので、あとでコメントがあるかもしれません。いずれにしろ、そういうかたちで、小さな有限会社の中に新しい事業への思いを持った人がどんどん入ってきて、どんどん社会的事業を起こしていく。そしていつかインキュベーションハウスを卒業して自分の拠点をつくっていく。またそうした活動の中から、新しいビジネスパラダイムや企業スタイルがインキュベート（孵化）されていく。そんなことを構想しているのです。

そして3番目です。3番目に、CWS コモンズ村というものをつくらうと思っています。コミュニティビジネスとかコミュニティ活動支援センターというのは、非常に範囲が広いわけです。そこで、もうひとつ、もっと実感できる自分の足下を固めることがしたいという思いがあります。CWS というのは私の会社のコンセプトワーク

ショップの略称なのですが、それに重ねる形で、Common Wealth Society という意味も兼ねて C W S コモンズ村というのを開村しました。

私のオフィスではこの 10 年以上、毎月 1 回、オープンサロンという誰でも歓迎の開かれたサロンをやっていますが、そこに来た人たち、つまりお互いに顔の見える関係を持った人たちが集まって、バーチャルな相互支援のコミュニティをつくっていかうという構想です。村のスタイルはバーチャルですが、実際の関係はリアルなものを基軸にします。実際に助け合う、身近な生活支援の輪づくりです。村人はそれぞれ、このようなことなら自分にできるということ登録しておき、他の村人はそのリストを見て、必要な場合には適切な人に頼めば、同じ村人として手伝ってくれる。それもお金を通さないでやるという仕組みです。

最近広がっているエコマネーと同じようなものです。ここでも、お金からもっと自由になりたいという私の思いがあります。お金も私たちが作った仕組みなのに、あまりに多くのお金に使われているのがとても哀しいのです。いずれにしろ、そこに集まった人たちが本当にさまざまな関係性を育てていくような状況をつくっていきたいと考えています。

これからは、個人の価値観にもとづく交換尺度を大切にしなければいけないとは思っています。昨日も 6 万円のポロシャツの話が出ましたが、モノに対する価値評価というのは本当は人によってさまざまなはずなのに、画一的な貨幣の基準で決められているということに私はたいへん疑問をもっています。個人の価値観にもとづく交換尺度で、ある人はそこに 100 の価値を見だしある人はそこに 1 万の価値を見だし、価値を見だしただらそれだけ感謝の念を込めて交換をしなければいいというのが、私の考え方なのですけれども、そういうことが実現できる仕組みを考えたいと思っています。つまり、外部にある貨幣万能の経済から、心の中の喜びの交換の経済へと持っていきたい。物々交換ならぬ事々交換の仕組みです。お金がなくてもゆったりと幸せな関係はつくれるはずだと確信しています。

この 3 つのプロジェクトを、いま始めたところですが、これらに共通している考え方、あるいはそれらの中心にある考え方が、ケアということですが。私はいまの日本が抱えている一番の問題は、

お互いに気づかいあうという関係が欠落したということだと思っています。つまりケアの概念がなくなってしまった。そのことが、さまざまな問題を起こしている。もういちどケアということを考えていくことが必要になってきているのではないかと。

それで問題提起したいのですが、まずひとつはこれからの社会を考えたときに人のつながりということをもう一度回復する必要がある。そのためにケアという言葉を見直してみた方がいいのではないか。私はケアのノーマライゼーションと言っているのですが、ケアというのは何か特殊な世界の言葉として受け取られがちですけれども、もっとケアという言葉を生生活の日常性のなかで大切にしたい方がいいのではないかというのが第一の論点です。

もうひとつは働くことの意味の回復です。いま企業経営の中でもケアという言葉が使われ始めました。信じられないことかもしれませんが、本当に個人個人の能力を発揮させるためにはやはりケアという概念が必要なのです。お互いに気づかいあうということが必要なのです。今までは、ノルマ主義で競争をさせていましたけれども、それではうまくいかないのです。お互いの能力を発揮させるためにはケアという概念が必要だと企業経営の世界でも気づかれ始めています。

さらに、ビジネスというものの捉えかたが変わってきていることも重要です。今日話にあった統合医療から出てくるビジネスというのは、今までのビジネスとちがうだろうと思うのですね。同じビジネスという言葉を使いながら、ビジネスのパラダイムというのは変わってきている。そして、先ほどお話ししたように、働くことの意味も変わってきている。コミュニティビジネスとか社会的企業という言葉も広がり始めていますが、そこら辺も少し議論したいです。

そして、3 点目は経済システムの見直し。特に私が 1 番大きな問題だと思っているのが、お金万能主義ということころです。お金の振り回されているところがある。いまの貨幣システムは全体から考えたシステムです。もっと個人から仕組んでいく経済というのがあっていいのではないかなという気がするのです。この辺りを議論できたらいいなと思っています。

そうした議論の中から、今日ご参加いただいた

みなさんがたがそれぞれに、みんなが輝く社会づくりとはいったい何なのか、そのための一歩をどう自分としては踏み出したらいいのかというようなことを少しでも考えていただければ、企画者の私としてもとても嬉しいことなのです。これらを意識しながら議論していただければと思っています。

かなり長くなりましたが、自己紹介を兼ねた今日のテーマの方向づけのための話というふうに受け止めていただければと思います。

それでは、つづけて池川さんにケアという話をしていただければと思いますし、櫻田さんにも細くも含めてお話をしていただければと思っています。

池川 たいへん刺激的なお話ばかりお聞かせいただいて、今回はケアということと社会のありかたとを結びつけてなんか結びつけて考えなければいけないということで、これはたいへんだと思ったのですが率直な感想なのですけれども。いろいろのかたとの関わりの中で私がここにいるということで、あらためて構想学会パンフレットを見ているのですけれども。非常に驚きなのは、外国語の日本語が多いということ、どうしてだろうなど日本古来の文化の言葉でどうも語れないような新しいことを考えている野でしょうかというのがひとつありまして、肩書きをたくさん書いていらっしゃるのをみて、何をするかたかわからないのですよ。それがやっぱり既成概念かもしれませんけれども。

そういうことのむづかしさはあるのですが、わたくしも還暦を迎えてこれまでずっと看護ということずっとを考えて、その枠からは出られないかと思えますけれども、さきほどのセッションとの問題もからめて現代社会におけるケアということがどういうふうを考えていったらいいのかという部分を離させていただきたいと思えます。

たしかに、現代の医療という観点からみた場合にも、非常に医学というのは進歩したと思っているのです。でも、先端医療の中身なんかを聞きますと私なんかは全然わからない。私が学生の時はだいたいわかりました。いまの医学は複雑化してつかみにくいものとなっています。ですから、先端医療ひとつ考えても遺伝子の問題ひとつ考えるにしても、自分のかかる病気まで予測できるよ

うなことになっていますから。

これは、テレビで見た情報なのですけれども、アメリカでは乳がんの家系に生まれた女性が発病に関する疑いがまだ何も無い状況で乳房を取ってしまったという人が出てきたんですね。いったいこれはどのような医療なんだろうと思ったのです。これは、本当に素朴な疑問で、人々がすごい不安に陥っているということも事実ですね。自分が罹るか罹らないかわからない病気に規定されているような現実があるような気がしています。

ですから、先端医療やめて下さいというのはなくて、現在の我が国の医療をみましても厚生省が圧倒的にお金を出しているのが先端医療ですよ。ケアの部分ではないのですよね。ほとんど、ケアの部分はお金が出ないのです。研究しようにも、文部省にケアのことやるといって出してもほとんどおらないですね。EBMとか何とかいえば、出ますけれども。だから社会全体がそのような時代になっているのですよ。私はそこをどこを考えていきたいと思うのです。特に話の始まりが、近代医学の視点から始まるというのはまちがいでないかと。人類は近代医学が始まる前にはるか昔から人類は生きてきているのですよ。そのことから考えると、動物の時代からよく生きるために努力を重ねてきているわけです。

そのことから考えますと、medicine とか nursing というのも、もとは格好よくいいますとテクネー、イヤトリケーといわれていたのですよ。つまりこれを訳すと、癒しの術ですね。癒しの術としてはじまって、それが人々が人間として生きていくさまざまな生命に関わる領域というものがあるのです。例えば、空気であるとか食べ物であるとか排泄であるとか運動であるとか。そういうひとつひとつの領域を、どのように自然にならなくて、人間がやるのか。なぜ自然にならなければならぬかということ、その人たちはやはり自然の、大宇宙の nature と、人間の本性の nature とは同一であると考えていたからです。ですから、それを整えていくことが、まずはケアだったわけです。

近代医学のはじまりとともにどのようなことが起こったかということ、やはりそれは、もう自然治癒力の世界ではないのです。むしろ自然治癒力を壊していく医術なのです。インターベンションというのはそういう意味でしょう。ですから、ケア

の領域ではインターベンションということばはありません。科学的介入などということはず、できるだけ自然にならうように、その人の生活をとのえるということが、ケアの根底にあるわけです。そこからインターベンションがおこります。その方法論的な根拠は生物機械論という方法論です。

私が問題にしたいのは、ケアの領域までもが現代の医学のモデルに非常に毒されているということです。そこをもう一度考え直さないと、どうしても看護は成り立たないのです。現代の日本で百校ちかくの大学ができていますが、そのいろいろなところに顔を出したり、聞いたり、側聞したりしていますと、看護学を教えるほとんどのコースが医学モデルなのです。

たとえば先生がかかわっておられる慶応の医学部でも、医学部にならった業績にならなければならぬということ、ひしひしと感じるのです。先生方からは直接聞きませんが、学生のいろいろな感想やお話のなかから私が察知したことは、そこだけの話ではありません。名前を挙げたのは失礼いたしました、多くの看護学部では、医学と看護が分かちがたく結びついているものだから、「医学と看護学の違いは定かにはできない」と教えているのです。もしそうであったら、何も看護学部などつくらず、医学部の程度の低いようなものをつくって、先ほどの話ではありませんが、合体させればよいではないですか、という話になるわけですが、やはりそうではないのです。

人間にとって大事なものは、もともといえ、つまり先輩格はどちらかというと、ケアなのです。西洋の社会では、ケアということを中心に医療が整えられてきたという歴史がありますから、現代の先端医学的な施設だけではなく、地域やコミュニティのケアといったことが十分にできるような制度になっています。風邪を引いた人が最初から病院に行くというのは、もしかしたら日本だけのことでないでしょうか。風邪を引いたりちょっと咳が出るというぐらいでしたら、ふつうは大きな大学病院なんかには行きません。そういうところが、日本の医療制度が間違ってしまったところだろうと思います。

なぜ間違ったのかといいますが、明治維新のときあたりに西洋の医学をどんどん取り入れたのですが、そのときに医学が、制度というか、知識と

技術だけ取り入れたのです。その制度になっているところをないがしろにしてしまったのです。ですから、いまだに看護とか介護とかリハビリという本当に人間的な努力を要するような領域は日の当たらない場所に追いやられて、「先端医学を考えない医者はどうも…」という状況になってしまっている。やはり日本はならうべきところをならっていません。そのために、西洋医学一辺倒になってしまった。

また看護の発祥が違います。西洋はケアが中心になって人々がやってくる。このとき医学的に大変な状況にある人には医者がやってきて治療する。最終的にそこで死んでいく人があれば死んでいく、あるいは元気を出したらまた旅に出るというような思想にもとづいていますから、現代の日本の医療制度は、まったくあるべきすがたではないように思います。

もちろん日本では、西洋医学をとり入れたときに、「大きい病院をつくって、有名な院長を呼んできた患者が来る」という思想だったのです。ですから、ケアを知ってもらおうとしても患者さんが来ないわけです。そこからすでに違うものができてしまった。地域コミュニティにも、ある程度のケアはあるにしろ、医療制度的なこと考えると、ケアのシステムが貧困です。どこの国に行っても、これほど地域のケアがなされない国はない。日本にケアということを中心にする文化が、どの時代かにあったのでしょうか。どなたか研究してくださいとよろしいと思いますが、そういう時代がはたしてあったのか、ということに私は非常に疑問を持っております。もっともケアということが遅れた国、ということに、企業戦士のような方を駆り立てていったと感じております。

どういことを考えるにしても、そういった原点の部分に立ち返る必要があります。ケアとか配慮、かわりということなのだと思いますが、看護もかわりのなかから立ち現れてくるのだと思います。一方的に、あなたは癒される人、私は癒す人、という関係ではないと思います。

私が最後に申し上げたいのは、教育や制度がよくないために、若い看護婦、わたしどもの後継者が、非常に変な教育を受けているということです。いくら大学をつくっても、とりかえしがなくらい間違っている。どういことかといえ、頭の中が医学モデルであって、ケアモデルでないとい

うことです。医学モデルを想定したカリキュラムが組まれるために、看護自体がおかしくなっている。

学生がいった笑い話があります。私は現在日本赤十字の医療センターの片隅にある大学なのですが、そこに向かって、渋谷からたくさんの患者さんを乗せたバスが出ております。それに学生が乗っていたら、隣の方の呼吸が荒くなったそうです。「あ、困ったな」と思ったのですが、そのとき彼女は「アセスメント、アセスメント」と考えたそうです。患者さんがどうして呼吸が荒くなっているのかアセスメントしなければならないという教育ですから、手が出なかったそうです。しかしだんだん症状がひどくなってきて、二回目に「アセスメント、アセスメント」と思ったときにも、彼女の頭の中では結論がでないわけです。一生懸命頭の中で構築しようとしたときに、気がついたら患者さんはバスの地面にうつぶせになっていた。ところがそこまでいくと、その前に、患者さんか患者さんの予備軍かはわかりませんが、周りのお年寄りたちがサッと手を出してそのお年寄りを介抱して、「まもなく医療センターだから大丈夫ですよ」とか、「運転手さん早くなんとかしてください」といって、無事にその人をつれていった。学生はもう自分を責めて責めて、大変なわけです。「何もできなかった」というんですね。

私たちは、次のようなことを教えています。人間の行為というのは、頭の中で構築されて、エイヤツと目的にむかっていくのではないのです。こういう目的のために私たちはやるのだ、というのではなくて、何といたらいいのでしょうか、まず手を出すのです。手を出して抱きかかえたときに、よく見たらいろいろなことがわかるのです。ですから、まず手を出さないことには、その人についてくわしくわからないのです。顔色がどのようであるとか、汗が出ているかどうかとか、冷たくなっているかどうかということは、手を出してはじめてわかることです。

しかしそういったことが、いまの教育では「まず診断」ということになってしまいます。最近では看護婦も診断することはご存知でしょうか。医者だけが診断するのではないのです。看護婦も診断するのです。診断にもとづかないと何もできないのです。ですから、診断できればすべてがわかったという錯覚にいたってしまい、手が出ないんです。

「あなた、呼吸がくるしいのは医師がこうこういったでしょう。主治医から聞いたじゃない。何で聞いたのにまた訴えるの?」という感じです。その老人については、私は父親を死なせた方の投書で呼んだのですが、娘さんは「やっぱり病院にいれなければよかった」と後悔しておりました。「家にはいっぱい手があったのに」ということばが象徴的です。病院には手がないのです。手があったのに、父親はあまりの苦しさのためにくくられてしまったというのです。そうして亡くなっていった。最後には、病院に入らなければ冒されなかったかもしれない感染症を冒して亡くなっていった。こうして父親を死なせてしまったことに対する、娘さんのものすごい怒りがあって、「そういう看護は許せない」と書いてありました。こういったことは、教育のシステムと無関係ではありません。看護というのは、教育は勝手にしておいて、こっちでそういう看護婦がやるのだ、ということではありません。教育自体がパラダイムを変えないことには、そういう看護者が出てこないのではないかという、非常に困難な状況です。

大学ができればできるほど、科学的に武装しなければならぬとかいわれることがいわれます。医学と同じです。医学もテクネー・イアトリケーの時代から、医学部になった途端に武装しなければならぬといっている、生物機械論的な方法をとっていく。そして臓器移植までいたる。そういう路線があるわけです。ですからいま、看護はいったいどこへいくのかということについて、私はまもなく定年を迎えようとしていますが、なんか心細いような状況です。とても輝くコミュニティにはいたらなくて申し訳ありませんが…。

佐藤修 できれば補足していただきたいと思いますが、池川さんは、ケアのこころというものが、人間に本来的に、本性的に備わっているものだと、本にお書きになっておられました。

人間というのは周りの人を気にするという本性がある。さきほどの学生さんも、頭に知識があればすぐに手が出たのではないかと思います。そういう意味では、人間には本来的なケア・マインドがあると思うのですが、それを教育でそぎ落としているという感じがします。

また医学の世界ではなくて、教育も病院もパラダイムシフトしないといけないかもしれないので

すが、もしかするとこれは家庭についても同様なのではないのでしょうか。

池川 そうですね。

佐藤修 いまの家庭の中では、ケアしあうという気持ちを子どもたちに伝えていくとか、育てていくことがないように思います。そこで、社会という視点、あるいは家庭という視点、つまり病院とか医学の視点からではなく、われわれの日常生活においてケアということはどう考えればよいのか、ケアということばをどう理解すればよいかということについて、補足していただければと思います。

池川 人間におのずと備わっているもの、というように、私はたしかに感じております。おっしゃるとおりです。むしろそれは西洋的な思想のなかではなく、日本的な思想のなかにあるのです。もともと人間は「手を出すように」生まれついている。決して「後ろ手に手を組んでながめる」という近代科学的な思考ではありません。手を出すのが人間です。ですから、「出せないようになってしまったのはなぜか」ということを考えなければならぬ、ということがあります。

人間の存在そのものは、単独で立っているわけではありません。ですから、自己完結的な自己というわけではありません。自己というものは、他者というものがあってはじめてそこに関係性がある、自分というものがあるのではないか、やはり人間というのは、もともと配慮的な存在としてあるのだと思います。それが近代的な文明のなかで、それが無い時代の方がより鮮明に、やはり助け合いのこととかいろいろなことがあったのでしょうかけれども、いま、あまりにそういうものが消え去っていくくらい、科学技術の進歩ということが、私たちが幻想を抱くような、もとの姿を消されてしまうほどに発達してしまったのではないのでしょうか。

ですから、私は日本の現状を考えても、先端医療をこれ以上やる必要がないのではないかと感じております。むしろそれをもっと、ハンディキャップをかかえて生きている人、それから本当にケアの必要な老人といったことに目を向けていただかないと、お金をつかっていただかないと。わずか

なお金を出して介護保険だなんだとやっているのは、何となくイヤな感じですよ。

佐藤修 できれば、それを私たちは、自分たちでやりたいと思います。政府とか医学の世界にだけ期待するのではなく、自分たちの問題としてもやらないといけません。先ほどの患者さんとお医者さんの関係でもありましたけれども、私たちもかなり引き受けなければならない部分があるのではないかと思いました。そういう意味で、先ほどの質問に対して私の意見をいえば、私は昭和 20 年代まで、配慮しあう文化、ケアしあう文化があったように思います。それがこの 50 年くらいで急速になくなってしまったと思うのですが、それはまた後で議論になるかもしれません。

櫻田 はじめまして、櫻田ともうします。おそらく佐藤さんは、「櫻田はケアのことをまったくわかっていない、すこし勉強しなさい」という意図で私をここに呼んだのではないかと思います。さきほどご紹介いただきましたように、コミュニティケア活動支援センターという活動に関わっております。実質的に私がかかわったのは 9 月くらいからなのですが、最初に声をかけられたときには、「大きな福祉」を考えているという話でした。

大学の授業等でこれまで様々な福祉団体と関わってみて、福祉業界はタコつぼ的に入り込んで、お互いの交流もままならないという姿を感じておりましたので、もっとジャンルを広げていく、あるいはさまざまな活動に光をあてていくというのは非常に素晴らしいことだと思ひまして、それにかかわったわけです。具体的には 9 月のあたまから末日までのあいだに公募をいたしました。さまざまなジャンルのさまざまな活動を、共創型ということで、あたらしい福祉のかたちを模索している団体・グループに、これからやろうとしているものも含めて応募してくださいといったわけです。既存の福祉業界のありかたを変えていくひとつのモデルを、われわれが支援していくことによって、たくさん全国につくっていかうということです。そういったムーブメントをつくっていきつけかけのひとつになればいいということで活動をはじめたわけです。

わずか一ヶ月のあいだでしたけれども、先ほどあったように 270 件くらいの応募がありました。

次のステップとして応募団体をしぼりこむという作業があったわけですが、最初は事務局の四名ですべての申請書を読み込みまして、これが本当にわれわれの意図するあたらしい福祉、大きな福祉に資するような活動であるかどうか吟味し、どんどんしぼりこみをはかって、アドバイザーの意見も聞いて30件にしぼりこみ、10月30日に最終選考会を行いました。

繰り返しになりますが、最終選考会は参加者のおもいのたけをそこでぶつけていただくということで、書類選考を通過した30団体が、各団体3分間でプレゼンテーションしてもらおうということでした。そこで、これがまたすごいとおもったのですが、選考会に書類選考で落ちた団体にも声をかけました。なかには「何を考えているんだ」と辛辣にいく団体もあったのですが、「そういう機会があるのならぜひ参加させていただきます」というところも20団体ほどありました。それから客観的にどこがふさわしいかということを考えて、投票してくれそうな方を20名ほど集めまして合計70名。そのほか何だかんだで100名ほどいたのですが、実質投票権をもっているのはその70名でした。

その70名の方たちに、3分間のプレゼンテーションをずっと順繰りに聞いてもらいまして、全部聞き終わったときに、30団体のリストに丸を5つつけてもらいました。4つでもだめだし、6つでもだめだと。5つつけて提出してくれということで、提出してもらいました。それを最終集計して、交流会の時間の中で結果発表を行いました。

実は最終結果をみて、私は結構怒っております、それで佐藤さんに「あまり怒らない方がいいよ」となだめすかされました。なぜそんなに怒ったかといいますと、プレゼンテーションのなかで、ある種「同情をひく」というか、意図的ではないにしろ、結果的にはそういうかたちのプレゼンになったグループがありました。非常に木訥な青年が、農作業をやっている。農場で馬を飼っていると。その馬に障害者の方たちを乗せるというイベントをやったら、すごく喜ばれたと。そのときの写真やビデオをみせるわけです。それで、「自分のような口下手な男が壇上に立つだけで、きっと伝わるものがある」といって、仲間が送り出してくれました。この仲間の期待に応えるために…」というところで絶句するわけです。そうするとみな

さん心打たれるところがあって、そこに多数投票したのです。結果を見ると、そこがトップ当選をしたわけです。

その結果を見たときに、あの団体が通るのは理解できると。あれだけのパフォーマンスがあったし、プレゼン的にもよかった。けれども、もちろんプレゼンだけで決めるのではないので、事前に申請書類の抜粋を選考委員に送ってありました。それを読んできてもらって、ある意味ではそこに書ききれなかったことをプレゼンで補足してくださいというお願いの仕方をしていたわけです。どれぐらいの人が実際にそれを読んできたのだろうかという疑問がものすごく沸き上がってきたこと、実をいうとその団体は、われわれ事務局のなかでは一度「これはあまりたいしたことないね」といって落としていたところだったのです。それをアドバイザーが目をつけまして、「これもなかなかみどころがあるから、もう一度考えてみたらどうですか」というかたちで、いわば敗者復活を果たした団体であったわけですが、そこが見事にトップで通ったということだったのです。

実際に、ある壇上にあがった市民グループにも私と同様の感想をもった方がおりまして、「こんなことで本当に市民社会というものを築いていけるのだろうか」ということをいわれました。いま特定非営利活動法人が法制化して5000団体くらいできているそうですが、さかんに「企業とのパートナーシップ」ということがいわれておりまして、協働作業というかコラボレーションでいろいろな活動がまわりはじめているときに、やはり本当の意味で企業と対等にうごいていけるNPOをしっかりと築いていくためには、もっと戦略的な取り組みが必要なのではないか。あるいはお互いの結びあいということをいいながらわれわれはこの活動を始めたわけですが、非常に先駆的な「プロ集団」といういいかたができるようなNPOにとっては、ほかの団体とつながることに、なかなかメリットを見いだせないという感想をいただきました。

私も「それ見たことか」という感があって、これは選考会のやりかたも含めて考える研究会を開催して、みんなで検討しなければいけないということを声高にいいました。そこで改めて考えさせられたのが「ケア」という概念だったのです。

実をいうと個人的には壁にぶちあたってしま

て、「思い、気づかいあいのある社会」という話が先ほどありましたが、確信犯的に「たしかにあそこはそうかもしれないけれど、自分のところも考えてみて、やはりあそこに入れてやろう」という、気づかひの発想、ケアの思想で投票された方たちが多数いたとしたならば、むしろその結果は喜ばしいものといえるのではないかという考えが頭をよぎっております。

いずれにしてもわれわれがやろうとしていたケアと市民活動とを、どのように折り合いをつけて考えていったらよいのかということ、今回の選考結果をみて非常に考えさせられました。われわれがまさに志向しようとしていたケアを考えたときに、やはり単純に「よりよいところ」にお金をつけていくというとはちがった発想の支援の仕方がでてくる必要があるのではないかと考えさせられた、というのがひとつです。

ちょっと長くなってしまいましたが、もう一点。先ほど池川先生のほうからご指摘がありましたが、慶応義塾大学の湘南藤沢キャンパスに今年から看護医療学部ができて、そこで私も一講座もたせてもらっております。それはどういう講座かといいますと、夏休み中にボランティア先を自由に捜してきて、五日間程度やってきて、どうだったかということをお話してくださいという授業です。一単位ということで、非常に気楽なものなのですが、ボランティアしたことがないという学生もけっこうおまして、自力で実習先をさがしてくるというだけでも大変でした。しかしそれを突破してやってきた学生が、ワークショップをやりまして、それぞれボランティアをやってどうだったかということをお話しました。

そのなかでなかなか興味深いことを話していた学生がおまして、たとえばある障害者の方に通っている作業場にいったところ、非常に単純作業なのですが、それをしている人たちを見て、自分がやればこんなことは軽くできるだろうと思ったのですが、実際にやってみたら日ごろやっている人にまったくかなわないというわけです。それで非常に驚きをもったそうです。

また、別の日にランドマークタワーに、自閉症の方と一しょに、ショッピングのつきそい、ガイドボランティアのようなかたちで行ったそうです。その際、あるレストランで食事をとっていたら、周りの人が非常に冷たい視線を投げてくると

いうことを、彼は感じたわけです。いままで一人でいったときには、そんなことはまったく感じなかったのだけれども、その人と一しょにいるということに対してすごく感じとれてしまった。施設の人か誰かは忘れてしまいましたが、「この方はほとんど何もリアクションは返さないけれども気にしないでくれ」といわれていたらしいのですが、彼は一生懸命話しかけて、食事をしていて何かをこぼしたときに、その方がティッシュをくれたというんです。そのことが、ボランティアにいた彼にとっては、コミュニケーションだったわけです。「これは僕に対する応えだ」と彼は感じておりました。それは気づきというか、教えられたものではなくて、その場において体験して、たしかにそうだと彼が感じたコミュニケーションだったのだという想いが、非常に重要であると思っています。

それからこれは別のケースですが、特別養護老人ホームなんかにいきまして、学生が車イスで移動のボランティアをちょっと手伝いに行きますと、「必要以上に手を貸すな」といわれます。「自分でいけるところは自分でいかせてやってくれ」と。それは手を貸そうとしていたボランティアにとっては、非常に大きな衝撃ではありますが、自立性ということをいわれるわけです。これを社会ということで考えていったときに、自ら頑張るものには手を貸すが、そうでないものには手を貸さないといった変な不文律があったり、社会のことを考えていったときに、ケアということを誰もがいつでも手を貸してくれる社会であるならば、その人は自力でなかなかやれないこともあるかもしれないし、やれることもあるかもしれないけれども、誰かが手を貸そうと思ったとき「いや、あれは自力でやらせないと、あの人の自立の妨げになるから」といった判断をするというのは、ケアの視点からみてどうなんだろうということ、私自身もいろいろ考えていることなので、ぜひみなさんとお話をさせてもらいながら、意見を聞かせていただけたらありがたいなと思います。以上です。

佐藤修 ありがとうございます。あとはどここの問題からはいつてきてもだぶんケアにつながると思っておられますので、非常に無責任ですが、気楽にどなたかに口火を切っていただいて、議論にはいつていきたいなと思います。

佐藤芳史 宮城大学事業構想学部3年の佐藤芳史です。ここ2日間の発表に自分が参加してみて、いまのお話を聞いていてひとつ結びついたことがありました。それがケアだったのです。佐藤さんのお話では「最近失われてきていること」ということで「気づかい」を挙げられました。さきほどの発表でもキーコンセプトとして「ケア」と挙げられました。ケアというのは気づかいなわけですよ。それで、僕自身が最近気づかいということが失われていると思ったのは、昨日僕のふたつとなりすわっている橋内君に、とても失礼なことをしてしまって、知っている人は知っているのですが、いちおうヒントとしては「太巻き」とだけいっておきます。

それで、気づかうというは何なのかと考えたときに、ひっぱりあって支えている状態、芥川竜之介の『クモの糸』の話と同じだと思うんですね。盗賊が地獄に落ちてしまうのですが、そのときに現世というか浮世で助けた一匹のクモの糸にぶらさがるわけですよ。そうすると他の地獄に落ちた人たちがつかまってきて、盗賊が降りるといいます。そして気づかいあいかなかったために、絆という糸が切れてしまった。それで盗賊はいわゆる失敗をしてしまった。ここでいう失敗とは不幸せということだと思います。

それがなぜ結びついたかということ、昨日の南山さんと山田さんの話で、「Brand is bonding」という話がありました。そこで「ブランド＝絆」とすると、中学一年生の方程式のようになってしまいますが、ケアということが今後ブランドになっていくのかなと思うわけです。ブランドがケアで、ケアが絆としたら、「ブランド＝ケア」になる。

このように考えると今後重要なことは、統合医療のことを含めて全部、ケアつまり気づかいあいということなのだろうと思ったのですが、どうでしょうか。

佐藤修 それではまず私が答えさせていただきます。よいブランドというものには、本当にお客様のことを気づかい、またその商品に対する気づかいがあります。ブランドというのは、まさにケアという概念に裏付けられていないとだめだと私は思っておりますから、その方程式に賛成です。

かつての輪島の漆器や、いまでも宮崎県の綾町

で食器をつくっている人などは、自分のつかったものは全部、未来永劫面倒を見たいといっています。ちょっとでも傷などついたり破損したりすると、そこに持って行けばきちんと直してくれる。うつわを通してつくり手とお客様の絆がきちんとできている。そうした中からこそ、はじめて本当のブランドが生まれると思います。日本のブランドはそうではなくて、流行的な意味でのブランドということがあるので、非常にもろい感じがします。そこでもう一度、絆やケアということをしつかりもつということが、私はこれからのブランドにとっても大切だと思いますので、そのご意見に私は賛成です。

橋内 宮城大学事業構想学部の橋内潤です。ケアということを知っていて思ったのですが、ケアとは滅私奉公ということになるのでしょうか。自分を消して相手を立てるといいますか。その辺が自立ということと対立していると思うのですが。

池川 ケアと自立ということが非常に対立しているように思われるかもしれませんが、たとえば悪い例でいいますと、自立を促すということが看護やリハビリテーションをするときに強いんですね。患者の自立を促さなければいけないということですよ。

ある看護婦はバケツにお湯をいっぱい入れてその患者のところに持って行って、「この人は自分の両手が見えるから、当然自分で身体がふける」ということで、そのバケツをボンとその患者のところにおいたあと悠然と引き返してきて、「あれは患者の自立を助けているんだ」という。でも、そこにはケアは全然ないんです。

たぶん病気になった方はいらっしゃると思いますが、身体の中から力が湧いてこないんですよ。小さな病気、たとえば風邪をひいたというだけであっても。ですから、病気でやんでいる人は、自分の両腕が動いても、花の水をかえるという思いがそこで実際の行為にまではいかないんですよ。ですからそういう人に対するケアというのは、たとえば手が動いても足が動いても、そこにあるんですね。

ある看護論者がいっている例にできますが、手術を受けて自分がはじめて歩けるようになって

て、はじめて大地を踏みしめて自分が歩くということに、すこく喜びを感じる少年が歩いていた。そこへ周りがよってたかって「あなたは転びそうに歩いているから、危ないから危ないから」と手をさしだす。それはあきらかにケアではありません。ですから、非常に難しい関係なんですけど、そういうことではないかと思っています。

橋内 それともうひとつ。その場合の自立はケアする対象のほうの自立ですが、ケアするほうの自立についてはどうなのでしょう。つまり、相手の側に立つということが自分を…。

池川 なんとなくわかりますが、相手の身になれるというのは、人間の行為としては相当高度なことなのですね。反省的な行為ですから。ですから自立していない人には、そんなことはできません。そういう関係じゃないかと思います。本人が自立していて、自分というものがあるから、相手の身になれる。相手の身になるということは簡単なようで大変むずかしくて、「私、私」といっていると、私の考えが先行すると相手の気持ちはどこかにいってしまいます。押し付けになりますから。

ですから、そこで自分、私からちょっと離れて相手に向かっていかなければならないという、非常に高度な考え方です。「私、私、私」という考え、「私が恥ずかしいから患者さんが恥ずかしい」とか、「私が痛く感じるから患者も痛いにちがいない」といっても、それは真実ではないかもしれません。私が恥ずかしいとおもっても、患者さんはなんとか助けてもらいたいと思っているかもしれないじゃないですか。相手の身になるということはそういうことです。自分というものがあっても、そこからすこし離れる。ナイチンゲールという人は、相手の感情のまっただなかに自分を投げ込むということをしています。それは非常に高度なことだと思っています。しかしそれが看護を学ぶ学生がはじめに通らなければならないひとつの関門であり、ケアする人の第一関門です。それができない人はいくら知識が増えてもケアする人にはならないんですね。

半田 これまでずっと黙っていた橋内君がここでひっかかって、質問を投げかけたということは、

相当ひっかかりを感じたからだと思います。今の先生のお答えはまったくそのとおりだと思います。ただ、さきほど彼は「滅私奉公」といいました。これはすこし妙に感じます。決してそういうことではないだろうと思うのです。たぶん滅私奉公というかたちのケアがあるとすれば、病院のなかではたとえば「病院に対して私を捨てて尽くす」とか、あるいは「体制に対して私を殺す」というような職務上のケアを指すと思います。しかし、いまここで話していただいているのはそういう種類のケアではないのではないのでしょうか。

橋内 滅私奉公というのは、ちょうど昨日発表した「絶対性」というやつで、大東亜共栄圏のことをすこしやっていたのですが、その時あった「家」の概念が、個人ではなく社会全体を向上させるというかたち、この場合「家」を向上させるというかたちでした。その時の説明にあったのが、自分を捨てるというか、自分ではなくて家のためにやるということでした。そういう意味で滅私奉公的なものがあって、それでいまのお話を聞いていて少し思い返しました。

半田 橋内君が学んだ大東亜共栄圏構想にあったある種の間違いはまさにそれであったと思うし、さきのセッションの統合医療のところではパターンリズムの問題が出てきましたが、これらはまさに家父長制の時代の典型的な権力のありかたであって、いまとなれば強く反省が求められているところのように思います。パターンリズムを根にしたケアは実にダブルバインド的な実に嫌らしいケアであって、忌むべきことだといってもよいはず（話者注：パターンリズムを根にしたケアの典型は制度的に「厳しさ」を前面に出しておいて人びとを鍛えるかの装いをし、実質実態的にはその無理につぎつぎとつまづく人びとを作り出しては、救済措置だの、例外事項だの、手当てだのを発して、「かわいいやつよのう、よしよし、俺がなんとかしてやるから」といった薄気味悪い権勢を振りまわし得々とする父権的温情である）。

ケアをすることが滅私奉公なのかということ、それはまったくちがうと思います。少なくともここで論じられているはずのケアとは、convivialなもの、自律協働を前提とするもの、自分をまず確立させるということがあってできることだろうと思

います。

また佐藤さんがおっしゃっているコモズンのありかたも、まさに個々がきちんと自分をもたないかぎりではできないことと思います。ですからそれは「私を捨てる」という方向とはむしろ反対ではないかと思うのですが、いかがでしょうか。

小板橋 ミルトン・メイアロフというかたが『ケアの本質』という本を書いております。そこでいっていることは「ケアをするということは自分が学ぶこと」ということです。ですからケアをするということを通して、自分をもっと大きなことをそこから学んでいけるということです。まさにいま佐藤さんがおっしゃった「輝く」ということは、滅私奉公することからはでてこなくて、それを通して自分自身をもっと輝いていけるものが見つけられるということだと、たぶん池川先生もそのことを含めておっしゃっていたのではないかと思います。

佐藤修 滅私奉公についてはすこしメッセージが不十分だったのですが、ふたつの豊かさモデルということをお話ししました。滅私奉公というのは全体から出発するアプローチだと思いますが、ケアというのはまったくちがっていて、私は自立が出发点だと思っています。

いま小板橋さんがおっしゃってくださったように、ケアというのは相手の自立を支援することです。それは自立した人でないとできません。しかし最初からみんな完璧に自立しているわけではない。たぶん相手の自立を支援することによって自分の自立が促されるという関係性の中で、一人ひとりが自立して、相互にいい関係をつくっていくということではないかと思います。

ケアするというと何か面倒を見てやる、必要以上に世話をしてやる、というように受け取られてしまうかもしれませんが、そうではありません。依存関係をつくってしまっただけでは、自立を促すことにはならない。上の目線で下の人の面倒を見てやるとか世話をしてやるということになると、まさに世話をする人と世話をされる人という関係ができてしまい、そこから依存する関係へと進んでいってしまう。そういう一方的なやりとりではなくて、お互いに、双方向に気づかいあうということがケアの本質ではないかというのが私の考えで

す。その出発点はつねに自立ということ。自立した人同士でなければケアの関係は成り立たないというのが私の解釈です。まさに小板橋さんがおっしゃったメイアロフの考えに賛成しています。だから、滅私奉公とはまったく反対の概念です。

高橋 宮城大学事業構想学部の高橋健太郎です。いま佐藤さんがおっしゃった「自立」というものについて疑問があります。孔子ですら「四十にして迷わず」といっているくらいなので、人は少なくともその歳になるまで修練を積まないと自立できないのではないかと思います。しかし、人はその境地に達するまでケアというものに直接かわることができないというのは、若くて未熟な私にとってはとても寂しいことです。したがって、自立していない者でも他人に手を差し伸べることは問題ないと思いたいのですが、いかがでしょうか。

荒川 地域文化創成社爽風白露の荒川創です。そこにつながるとは思いますが、佐藤さんは国が豊かになることを優先するか、個人が豊かになるほうを優先するかという疑問を投げかけました。これまでの日本は国を優先してきたと思います。その手法は個人を犠牲にしての国の豊かさの追求だったと思います。もしこれから個人を優先させて社会をつくるとしても、社会を意識しない個人の豊かさを求めるとすれば、それもほんとうの豊かさにつながらないと思います。どちらか一方のみを追求するのでは人間の豊かさにはつながりにくいと思います。やはりこれからは個人あり方は人と人のつながりを考慮した社会の中での、個人の豊かさを求めるべきだし、国のあり方としては個々人が豊かになるような策をとるべきだと思います。つまり、個人と国が切り離されたものではなく、ひとつのものになるようなあり方です。

ところで、こころのケアが重視される時代になりましたが、なぜそうなったかといえば、やはり生活や労働がおもしろくなくて、充実感がないものになっているのだと思います。忙しい生活になっているということもあります。忙しいという字は心を亡くすと書きますが、そういう意味で仕事の質自体がかわることがケアを必要としない充実した生活につながるのでは、と思うのです。そ

のことを踏まえた際、これからのキーワードは身体性だと思います。風土と身体性を重視する事業が必要だと先ほどいいましたが、それは特定の地域のテリトリー内で労働してゆくということですが、地域というテリトリーを考えると必然的に使える資源は限られてくるし、人材も限られてくる。そうしたなかで仕事をしようとする、必然的に拡大再生産的な仕事はできないから、一日に生産できる量も限られてくる。そのうえ身体性にもとづいたものづくりをしようとするれば、なおさら時間がかかりますから、生産量はかぎられる。そうなると、ゆとりも生まれるのではないかと考えています。

佐藤修 やはり身体性にきましたね。個の尊重とか自我の自立とか、個というものを日本はこの十数年、意識しすぎたと思います。先ほどからお話にていように、人はひとりで生きているわけではなく、つながりのなかで生きている。それも人と人とのつながりだけでなく、人との、人と自然とのつながりのなかで生きている。そのつながりを軽視して、個の尊重とか、個の確立ということをしていすぎたと思います。結果的には一人ひとりが孤立してしまい、不安にさいなまれ、過剰防衛的な予防措置をとり、する必要のないことまでするようになっていく。

ですから、人と人、人とのつながりを回復してゆくことが大切です。個を出発点にするということは決して自分だけのわがままな世界を構築しようとするものではありません。宮沢賢治がいつているように世界のみんながしあわせにならなければ、自分のしあわせはありえない。ケアのころは人間につきものですから、隣に不幸な人がいたら、自分もきっとしあわせにはなれないと思います。例外はあるかもしれないけれど、ふつうはそうです。

働き方の問題ですが、私たちの生き方がいま問われていて、その出発点として自分とは何なのか、つながりとは何なのか、というあたりを取り戻してゆくことが大切です。もう一度まわりに対するころのパイプをつなげること、それがケアではないかという気がします。ケアというものは一方的な行為ではないという気がしてなりません。

佐々木 NeoALEX 高等教育研究院の佐々木で

す。ケアというものをもう少し明確にしたいと思います。櫻田さんのおっしゃったお涙ちょうだいの話がありますが、そこは旧来型のケアであり、そのことははっきり区別しておく必要があると思います。そこでおこなわれているケアを想像すれば、たぶん頭のなかでケアしているのではないかと思います。そのプレゼンテーションに同情的になったということでしたが、その一方で冷たい視線があったと、この形式はまったく変わっていないわけで、そここのところが問題であるように思います。

手を差しのべるというのですが、実際は手を差し伸べていないのではないかと、その NPO 団体には、みんながかわいそうに思って投票で 1 位になって資金が投入されたわけですが、その資金の投入というのは、先ほどからいわれているような交流ではないです。貨幣の万能主義にはばくもすぐ疑問を抱いているのですが、やはり交換概念がまったく忘れられているのではないかと考えています。そういうのは互酬的におこなわれるのでなければ、ケアというのはいけいではないかと思えます。ということで、そこでおこなわれたケアというのは、池川さんの話にありますように、頭のなかでかわいそうだと思われるけれども、実際にそこではなにがおこなわれたのか、そして資金が投入されたら、そういうことを考えると、さきほどお話にありました福祉の措置型というかたちではないかと思えます。

したがって、大きな福祉という観点からケアを考えると、やはりかわいそうだと思うころはたいせつだと思えますが、そこから生じる不幸というか、変わらない社会というものがひとつ問題だとぼくは思うので、これからケアということをしていくことを考えると、そこは明確に区別したほうがよいのではと思いました。

佐藤修 すこし誤解があるかもしれないですが、その対象となっているプロジェクトは、障害者の人たちにも十分楽しんでもらおう、具体的に言えば乗馬を楽しんでもらおうという内容のものなのです。決して従来型の福祉ではないのです。みんなが楽しくやろうよ、ということなんです。ところが、その人はプレゼンテーションで、感にせまって涙が出てしまった。それをみてみんな感動したわけです。で、これについても後日談があっ

て、われわれのメンバーのなかで選考会の反省会をしたわけです。私も実はそれが選ばれたことを最初は腹立たしく思っていたのですが、メンバーのひとりが、その人たちがこれから何をすることが大切で、その資金がひとつのきっかけとなって何か大きなことができればいいのではないかと。そして、そのひとたちがそれを有効に使ってくれるように働きかけていくとか、一緒になって行動するというのを通して、むしろわれわれの力量の問題なのではないか。だからどれが決まってもよいのではないかと、言うのです。確かにその通りで、頭の中に勝手に自分の尺度を作り、それを押し付けようとしている自分に気づいたわけです。まさにケア・マインドが不足していたと反省しました。それに涙がでるくらいの思いの深さがあれば、うまくいくはず。うまくいかなければ私たちの問題でもあるのです。支援しあう関係をつくらうというのであれば、当然そうなります。理念先行で、まだまだ私自身の身体が動いていないことを反省しました。

それからもうひとついえることは、前のセッションで、患者のレベルとか、医者レベルといったものが出てきましたが、確かにある領域にはレベルがあると思うのですが、私はレベルとか評価というものに疑問をもっているのです。視点が変わればどれがよいとか悪いとかいうものも、変わってくる。だから、むしろいまのような大きな変わり目のなかでは、さまざまな評価基準をもった人がぶつかって行くことが大切で、あらかじめこれはいいなどという基準は設けないほうがいいのではないかと。これがもうひとつの反省点です。

そういう意味ではいずれもまだまだ試行錯誤の段階で、パフォーマンスを評価すればまだ60点くらいかもしれないのだけれども、いま佐々木さんがいってくれたことも含めて、ぜんぶそれらをさらけ出しながら、むしろみんなできつってこうという運動を起こしたいのです。

佐々木 やはりいまのお話を聞いて思ったのですが、その投票したみなさんが、それをケアであると思っていることが現状の問題ではないかと思ったのですが、そういうプレゼンテーションという部分でひきつけられていくというのは、単純といえば単純で、それにみなぎひきつけられていくとすれば、昨日のNPOの話にもありましたが、

社会価値創成型というかたちでやってゆく場合に、後手にまわりがちになるのではないかと、だから自分が変わらないといけなかな、と思ったのですが。

櫻田 NPOへの資金助成についての問題の一つは、財なりサービスなりの提供をお金の支払者に対しておこなうのではなく、別の対象者におこなうということです。したがって両者（支援者・対象者）の間で経済的価値の交換はおこなわれず、譲渡になるわけです。ここに関係が一方的になりやすい大きな要因があります。だからこそケアの概念が必要になるわけですが、ケアという概念が相互的という場合、本来は財やサービスの提供者と受給者との関係を言うべきかも知れません。しかし、すべての関係においてケアという考え方が成り立つとするならば、同じ土俵に上がった助成対象候補者同士においても、それが成り立つと考えたいということです。むしろ、そのことを強調していくのが「コミュニティケア活動支援センター」の役割なのではないかと思えます。だからこそ佐藤さんが言ったように、支援される対象はどこでもよく、大事なことはこれを契機に互いの成長に役立つような関係をどのように築いていけるかなのだと思えます。

一般の資金助成について考えるならば、問われるのは公平さや公正さ、あるいは審査側の見識でしょう。見識というのは、単純な優劣ではなく、その助成金の意図や性格をよく理解した上で、これを選ぼうという判断の拠り所です。ここがブラックボックスになっていたことで、自分たちの活動の方が優れていると思こんでいる団体から公平さや公正さについても疑われるというのがこれまでの図式だったわけです。これを解決する上で、今後は助成団体側にも説明責任が問われるようになるかも知れません。手前みそですが、佐藤さんは後日、すべての応募団体に審査理由を付記した手紙を書いています。

われわれはさらに踏み込んで、選ばれる側にも選考に参加してもらい、選考プロセスの透明性をさらにあげようとしたわけですが、その結果、その部分の公平さや公正さは確保できましたが、見識（参加者がつくる公共概念としての）が十分反映されなかったのではないかと反省したわけです。しかし、その結果すらも確信犯的に行われた投票

結果とするならば、ケアの概念で解釈したいと今は考えています。つまり、自分は落選したけれども、あの団体は通ってよかったと思えるとか、落選したけれども自分に協力できることがあれば手伝おうという団体があるなら、それこそはケアの精神にうちまわっている団体と捉え、志を同じくするものとして、われわれも大いに応援したい。そういう団体を見つけてつないでいくことが我々の使命なのだと考えています。

その意味から言えば、われわれがおこなっているのは厳密な資金助成ではありません。私はNPOが企業と行政の対象とならない事業を隙間産業的にこなしていく組織だとは思いませんし、そこで満足してはいけなないと考えます。企業が身を置く競走社会が認知されるのは、公正で公平な競走が可能なきっかけです。本来、それを管理監督する立場にいるはずの行政はちゃんと機能していません。私はNPOが社会に公平さと公正さをつくりこんでいく当事者になるべきだと考えます。そのときに、忘れてならないのがケアの精神ではないか。最近はその風を考えています。

上田 神戸大学大学院文学研究科の上田です。どうも気遣う、気遣われるというのは本来的にはすぐに行えることなんですけれど、なぜか、いまは結構努力しなければいけないことのように思われてしまっているようです。そこで他のことばでなにかよいものはないかと考えてみると、隣の国韓国のこのころとしていわれていることばに、ジョンつまり情ということばがあります。そのことばはどのような意味かということ、共有財、ふつうに韓国の人たちは共有財としてお互いのことをしてしまう、たとえば、公衆電話をかけるときに、お金があまりましたと、するとそのお金を上に置いてつぎの人に使ってもらおうようにする。これは単に電話をかける次の人が困らないようにする、こういう行為が韓国ではごく当然のようにおこなわれているそうです。

これはなにをいいたいかということ、気遣うということとはごく普通にできることなのですが、どうもぼくたちの感覚では努力しないとできない、自律が必要だとか、そういうのではなくて、ごく自然に共有財としてぼくが気遣ってあげるし、相手も気遣ってくれるだろうという暗黙に、君とぼくと、知らないあいだだけれど、絆のようなものが

あるという関係にできれば、やったから気遣い返してくれではなくて、共有している資源とか、思いということがごく自然に流れてくるような、そういうことです。

ジョンというのを日本語の昔のことばで、たとえば和ということばがあるのではないかとも思えますが、和ということばの怖さは仲間うちにはすごく暖かい気がするのですが、よそ者にはすごく冷たいという感覚があります。ぼくはすごく田舎の生まれでして、京都の大原というところに生まれているのですが、仲間うちにはすごくやさしくて、いろいろなやりとりをしたりするのですが、外の人が入ってきたときに、祭りには参加できない、なんかちがうよね、というような独特のコミュニティ感があります。これが韓国でジョンという場合は、道ばたで出会った人でも、まったく地域が別の人も自然に気遣う、自然に何かを貸してあげるとか、そういう一対一のつながりが明確にできているそうです。

だから、先ほどの発表のなかにコモンズ村というものがありましたが、それが和という仲間内だけの関係ではなくて、他の人が来てもこの村のものはみんなのものとして作ったのだから、たまたま寄ってくれたのだから、やさしく寄り合おうよといったような仲間づくり、そうしたものがケアのひとつになってくれればよいのではないかと、無理に努力するのではなく、もっとやさしい気遣い、自然な気遣いとしてのケアであってほしいと思います。

佐藤修 ちなみにコモンズ村とインキュベーションハウスとコミュニティケア活動支援センターというのは、ある意味で一体でして、完全に開かれていて、旅人、まろうど大いに歓迎という仕組みを考えています。

それからジョンという話がありましたが、日本にも、たとえば催合い（もやい）とか様々な呼び方がありますが、まちががなく 50 年前まではそうしたものがあったと思うのです。どうでしょうか、みなさんのふるさとでそういった概念はないでしょうか。そういう心遣いというのは私たちの親の代まではあったのではないかと気がしています。

高橋 BM ネットワークの高橋茂人です。いま

のお話を聞いて思うことは、沖縄では催合いというムエと発音します。また、日本には昔、結というものがあり、沖縄ではユーマーといいますが、どれも地域でなにかをするときはみんなですという、屋根を葺くときはみんなです、それを順にしてゆく。こういう世界があったのです。佐藤さんがいわんとしているところは、たぶんそういうことだと思います。それがたぶん地域というものをあらわしていると思います。

沖縄の催合いの場合はもう形骸化していますが、ある種、アンダーグラウンドマネーのようになって、お金がないときは手を挙げて順に集まって、掛け金をするわけですが、講という世界です。それはいまかたちとして残っていて、月に一度会うという、まあそういうことでもなければみんななかなか顔を会わせられないということになっているのかもしれませんが。そういう意味ではコミュニティというものが、崩れてきてしまったというのが現実でしょうね。

佐藤修 まさにいま催合いとか、連とか結とか講とかといったものがまちづくりの非常に大きなキーワードになりはじめています。私が会社を辞めて青森から沖縄まで歩いて感じたのは、そういうものがまだ日本には意外とあるではないか、ということです。おっしゃるように形骸化しているものも多いのですが、そのところはまだきっちり残っている。まちづくりという観点でいえば、それをもう一度取り戻せばよいのではないかと思います。私たちの生き方においても、先ほどもちょっとお話があったように、ケアというのは生まれながらにもっているわれわれの感性というか本性なんだから、あまり頭でかちかちしないで素直に生きていけば、ほんとうに困っている人がいたら自然と手を出すということが簡単にできるのではないかと。そして、それをやっていると、あるとき「なんだ、結局自分に返ってきているじゃないか」ということになるのではないかと思います。そうした好循環の関係性をもういちど取り戻したいと思います。

新谷 三井物産戦略研究所の新谷です。いま人々の情とか、つながりという話で、日本にもそれは昔はあったのではないかと佐藤さんの話がいろいろあって、確かにたとえば、ぼくは香川県の出身なのですが、四国にはお遍路さんがあって、これ

に対して地元の人は泊めてあげたり、食事をあげたりということが昔はあたりまえにありました。いまはそういうことはなくなって、お遍路さん自身がタクシーでまわったり、クルマになってしまったので、そういうことはなくなってきているのですが、田舎のほうにいけますと、行けば行くほどこういうのがまだ残っているのです。

で、この佐藤さんの3つの仕組みづくりというのは、ぼくの専門中の専門でして、いろいろいいたいことがあるのですが、それはおいておきまして、このケアという話でひとつ思うのは、いろいろ人を思いやるとか、相互性とか、いろいろあると思うのですが、やはり基本となるのはボランティアだと思うのです。常にこういうことをやるのはなんであれ自発的にやらないと相手からも返ってこないし、ぼくはこういうコモンズという考え方に対して、これはボランティアコモンズだと思っているのです。つねに自分からやらないと何も動かない。ということでこのボランティアということもつけ加えておきたいと思います。

猪岡 宮城大学の学生、猪岡です。いま自発的に、ということがありましたし、さきほどの話についてもいいたいことがあるのですが、わたしは大学に入ってから留学生と話す機会が多いのですが、それで聞かれたことがあって、世界で唯一成功した社会主義の国はどこだと。で、わたしはどこも失敗したのではないかと考えていたのですが、その留学生からは「日本だよ」といわれたんです。それを聞いて結構ショックを受けました。日本は資本主義の国で、そういう教育も受けてきたのですが、考えてみれば、確かにそうだと思います。昔の滅私奉公が家に対してあってのが、企業になったというだけで、地域の活動にしてもそうですが、ケアということがありますが、気にするのは自分だということがすっかり抜けていて、大きい枠組みにとらわれすぎてきたということがあると思います。民主主義だといっても、それが現状だと思うのです。そうであったということに、制度ということではなくて、気持ちの部分に気づくべきではないかと思います。ケアをする人やそうした活動をする人はそういうことわかってすべきだと思います。

さきほどいろいろ引用があったので、わたしもここで引用させてもらいたいのですが、安部公房

に『赤い繭』という作品がありますが、このなかに、路頭に迷ってベンチで寝ている男がでてくるのですが、そこに「このベンチはみんなのものであって、誰のものでもない。ましてやおまえのものであろうはずがない」と警官がいいに来るのです。こういうみんなのものであって誰のものでもない、だからおまえのものではないということが公然とまかりとおるような日本社会というのはやはりおかしいと思います。

ケアをする、気遣うというのは自分から自発的にというのは、民主主義の基本だと思うのですが、それがすっかり抜けていて、いままで日本は民主主義の国だと自分がよく思ってきたものだと思っているところなんです。

さきほどのケアの話で、まず手を出して、それからわかるということがあったわけですが、まず気にするべきは自分だということを自我の確立という点からも、自分がなにをしたいのかということにもっと積極的になれるともっとよくなってゆくとするのですが。

端田 NeoALEX 社会構想研究院の端田です。最初にその話をさせていただくと、それも確かに自発性だと思うのですが、ただぼくが最近思うのは、この「自発性をもっと養っていかねばいけない」「自律的でなければいけない」ということを最近よく耳にするようになった気がします。でも、それはある種、他律的なことだと思うわけです。

「自発的でなければならぬ」という人たちは自発的になるために、どんな働きかけをしているのかということをもう一度、問い直さなければならぬのではないかと。ぼくはある社会学者の M さんという人があまり好きではなかったのですが、あるとき NHK の夜中の教育討論かなにかを見たときに、結局、いまの教育論ではかならず自律、自発ということをやたらというけれども、実際にどれだけの動機づけができていくかということ、実際にはできていないと、やはり、動機づけが必要なんで、それを促すような学びへの魅力を伝えていくことが教育者の役割なんだと、いっていました。

ぼく自身もそういうことを最近思っています、動機づけとなるようなテーマ設定、話題をつくる。ぼくのようなペラペラしゃべる人間は少しでも話しやすいように空間をつくるとか、時間を

つくとか、その動機づけ、気遣いをすることがまさにケアではないかと思っています。だから、なにか勉強したくなるとか学びたくてということ、やはり自発性が少しあると思う人間は、それを自発的になれていないと思う人間に対して考えていかなければならないのではないかと考えています。

大村 NeoALEX 社会構想研究院の大村です。私もまったく同じことを発言しようと思っていたところなんです。私は今回の学会で教育に関連する研究をおこないましたが、「教育」ということばの字義を探ったときに、「教」のほうは鞭で打って教えるという意味がありました。つまり「鞭で打ちながら育てるのが教育である」ということになってしまうわけです。

しかし、池川先生の文脈でいうケアの概念をお借りすれば、教育はきつと、鞭で打って育てることではなく、本来もっているものを引き出すということになると思います。また、教育とは本来「共に育つ」という意味の「共育」であるべきだという話もよく聞きますが、これもお互いのケアがなければできないことでしょう。

池川先生は大学や看護の現場で、佐藤さんや櫻田さんはコミュニティケアの活動や大学や企業の現場でご活躍なさっておりますが、その実践のなかでこの問題についていろいろと注意なさっていることを、具体的におこたえいただけますでしょうか。

深尾 身体動作研究会の深尾です。関連する話ですが、この場ではいちサラリーマンとしての発言をしたいと思えます。わたしは企業に入って3年目ですが、いま企業で働いている人は一般に夜遅くまで働いて、しかも給与は残業代がどんどん減らされていて、その一方でリストラで人は減らされ、仕事はどんどん増えてゆくという状況のなかで、若い人たちはほんとうに会社に対して滅私奉公というかたちで働いています。そういうことを続けていて、ふと「これはなにかおかしいのではないかと」最近思うようになり、で、先輩たちがここで発表されるというので、おもしろそうな話も聞けるのではないかと思ひ、これはいい機会だと来たのですが、最近、疑問に思っている会社のありかたに対して、「あたらしい働き方を

考える」という話が興味あるわけです。

わたしたちサラリーマンはいまどうしようもない状況にあるわけです。働くしかない、というか、そうした状況のなかで、このケアというものを利用すれば、どのように会社を変えられるのか、実際、どのような働きかけをされてきたのか、ということをもう少し知りたいのですが。

池川 最初のご質問ですが、いろいろなことばが行き交っていますが、ケアというところのケアというような発言もどこかでありました。しかし、こころのケアというのはわたしの考えるケアというのとはちょっと結びつかないのです。やはりケアというのは、最初に申しあげましたように、人間が生きる次元で、なにごたいせつなのかということですね。飲んだり、食べたり、寝たり、起きたり、運動したり、排泄したり、という、そういう次元の人間性、それをきちっと整えないかぎり、こころのケアなんてありえないと思っています。ですから、看護のケアというのはそのあたりからいくわけです。

どんなに思い悩んで鬱病になっているかたでも、そのかたの命の源のようなところの整え方がなかったら、いくら天使のような方があらわれてそばにいてくれても、ケアされたことにはならないのではないかと考えます。

それと全体的に考えていることは、なんのためにそれをするのかということでしょうか。究極的には、ボランティアにしても、コモンズ村にしても、看護にしても、最終的になんのためにそれをするのか、それが問われていると思うのです。わたしどもはケアするときに、患者さんのために、とか、内心はやはり看護学のためにとか、いろいろなことを考えているのですが、ほんとうのところはどうなのだろう、と。

あなたのためにするわけでもないのですね、ケアというのは。では、わたしのためにか、といえどもそうでもない。あなたのためというのは関係があるかもしれませんが、神様のためでもない。医学のためでもない。社会のためでもない。なんのためにケアをするのか。ということをつきつめて考えたときがあったのですが、いまわたしがもっている結論は、それはとことんケアを必要としている人、その人に集中するべきだということです。ひいてはそれはわたしのため、ということもある

かもしれませんが、そういうことではないのですね。わたしのためにはなんにもならないかもしれないけれど、その必要としている人に集中していくということがケアということではないかと思っています。それが大きい意味での身体性にかかわってくる、そういうものではないかと感じています。

櫻田 少し大学のほうでもいろいろやっていますので、その関連も含めてお話をしたいと思いますが、わたしの場合は、ケアというか、ボランティアというところでやってきたわけですが、なんのためのボランティアかということは基本的に考えていないのです。必要があればそれに対応するというかたち、要するに条件付きのボランティアというものがあろうのかということがもうひとつのテーマとしてあるのですが、要するに有償、無償といった話です。ほんとうにその必要というものに対してわたしたちは正面から向き合っているのかどうか。極論をいえば、自我がないところで行われるケアが、ほんもののケアではないか、とわたしは勝手に思っています。つまり、なんのためにということではなくて、必要に対して向き合う、手を差しのべる行為です。あとから必要として言うことはできるかもしれないけれど、たとえば、これは極端な例にとられるかもしれませんが、前に新大久保の駅で落ちた人を助けようとして飛び降りて命を落とした人がいましたね。あれなんのために、では答えが出てこないと思います。ボランティアもそれと似たようなところがあるように思っています。それを考えてもらいたいということですね。

では、学校のなかでそれをどういうふうにするのか。教えることはできないですね。で、わたしは現場に行きなさい、と、で、自分で気づくことがだいじですと、いいますけれど。それを壇上から100回言っても全然意味がないですね。むしろ、現場に入り込んでそこで試行錯誤を繰り返しながら、自分で見つけてゆく。ほんの些細なことかもしれないけれど、見いだしたことは何かということをも自分なりに、きっちりそこで解決できないものであれば、ずっと自分のこころのなかにもって、反芻しながら、つぎの人生を生きてゆくうえでのひとつの糧にせよ、というようなことであるのかと思っています。これ簡単に答の出る

ことではないのかな、と思っています。

で、そういう場を作っていくときにわれわれが心がけていることはなにかというと、出過ぎないことです。感謝されない黒子が最高の黒子という言い方をしているのですが、講座の準備をして、ボランティア活動に向かいます。で、そういう大学の授業があったから、事務局があったから、よかった、ありがとう、といわれるようなことがあったら、わたしはその授業は失敗だと思っています。自力でここまでやったのだと、けどほんとういうと、自力だけではできない、その微妙なさじ加減のところを力を貸してゆくところがだいじなところかなと。やはり自分でできたというふうに思ってもらわないと、これは意味のないことだと思っています、そのためにいろいろと試行錯誤を繰り返しているという状況です。

半田 有償・無償の問題にも関連して、とくにボランティア活動を教育機関の授業のなかに組み込むということに関する基本的な問いかけがあります。たとえば大学であれば、その内発的なはずの活動に対して結局は外発的に行為を誘発させる単位が出ることになります。趣味に報酬は無用のお節介であるばかりか、穢れとなります。趣味とボランティア活動はもちろん違うものですが、その行為の内発性においてははずいぶん似た性質があります。

また、何か思うところあって活動に参加しなくなれば、それが授業に組み込まれていた場合、それなりの評価になって返ってくるのでしょうか、そのことに関してはいかがですか。やはりボランティア活動というものはそのことによって得るなにかを知るためには、どうしても授業として組み込まざるを得ないものなのでしょうか。

櫻田 必ずしも授業に組み込まざるを得ないというものではないと思います。ただ、授業だからとったという学生もいることはいます。

半田 もうひとつお聞きしたいことがあります。今日のお話をずっとうかがっていて、ケアに関する話は池川先生の場合は、まあ個人的に先生のファンであるということもあるのですが、自然と惹きつけられてしまいます。それはやはり

看護の世界というのは特殊だからということもあると思います。つまり、徹底的にたいへんな状況にある人がそこにいるわけですから、そこでのケアは、あきらかにいまいうところの「ケア社会」のケアとは次元が違うはず。逆にそういうところからいえば、ケアというものをごく日常の社会のなかに持ち込んできて語るということは、結構危ない面があるのではないかと感じます。

弱いものが一番強い立場になるという、これは松岡正剛さんがフラジャイルということばで多角的に語っていますけれども（注：『フラジャイル』1995、筑摩書房）、そういうケアしあう社会をつくりあげていったとして、そういう社会はどうもヘルシーとはいいがたいのでは、と感じるところもあります。

もちろん、それを語るのであれば、健康とはなにかという大きな問題もべつに検討したうえで語る必要がありますが、それはひとまずおいておいて、普通に生きている感覚では、ケアなんてとんでもない、というのが基本的スタンスではないかと思うのです。そのうえで、ケアというのはそういう必要に追込まれたら、そうせざるをえないような特殊なものなのではないか、特殊というのは語弊があるかもしれませんが。秘すればこそ花、そういうものではないかと思うのです。そうなるとケアに満ちてその花が咲き乱れているような社会には、むしろむせかえるような芳香を感じてしまうのですが、そのあたりどうお考えでしょうか。

池川 確かに看護という領域のなかでは、ほんとうにもう全身が麻痺してまばたきでしか自分の意志を表現できない、そして身体のあらゆる機能が麻痺してしまい排泄ひとつにしても、看護婦がものすごい力で押し出すようなことをしなければ生きていけないというようなことをする、そういう次元のケアもありますが、しかし、わたしはそれを普遍的なものとして言うてはいけなことはないです。

やはりケアというものは極限的な状態のものもあれば、そうでないものもあると思います。で、そういう社会でないとその看護ということの意味を見いだしていただけないのですよ。これまで、日本の社会がケアということにほとんど価値をおかなかったですから、だから、ケアする人の身分が医師などに比べると著しく低いです。どこがど

う違うか、というくらい違うわけで、やはりそれは社会全体がケアということに対して、どういう価値をおいているのか、ということと関係があるのかな、と感じています。日本の国ではそれがかなり特殊なように思います。もっと他の国に行ってみてみたい、もっと違うかたちであるのではないかと感じています。

半田 諸外国の話はわたしもよく聞くのですが、ただ、日本の社会のなかにおっしゃるような日常的なケアを持ち込んだときに、やはり弱者のところに基準をおいて、そこに全体の問題の焦点をもっていってしまって、大局において重要なところを見過ごすというか、無意識的に後回しにしてしまう傾向があるのではないかと感じています。

とくにケアとか癒しということが最近とくに語られすぎていることによって、そういうことが目立ってきていると感じています。こういうことをいうと、おそらくすぐに弱者を見過ごせというのかとか、だいたい弱者などといった君の立っているところはどこだ、といったことがいわれそうですが、わたしのいいたいことは、そういう「弱者」なる概念の孕む圧倒的な強さとそこから発する権力、さらにはその有無をいわせぬ力を背後で利用している灰色の力を問題にしたいのです。

そうした弱さがもつ強さは誰もがすぐに手を差しのべて、あれこれと論議もできるだけに、ほんとうは今、十分に考えて行動しなければならない大きくて根底的な問題にとりかかる困難さを一時的に先延ばしにできるわけで、そういう無意識的な合理化がケア社会の背後に潜んでいることを危惧しています。

佐藤修 今日は帰りのバスの関係でもう終えなければならぬわけですが、3分ほどオーバーしても大丈夫でしょうか。まだ、いろいろと話すべきことが残っているわけですが、先ほどの質問にもまだ答えていないので、それも含めてまとめにしてゆきたいと想います。

まず、大村さんのご質問の教育。私が思うのは、なぜ教育などという言葉にこだわるのか、ということ。こだわる必要はまったくない、と私は思います。私たちが気をつけるべき問題は、言葉にがんじがらめにされているということです。学校はかくあるべし、教育はかくあるべし。そんな

ことはどうでもいいのです。やりたいようにやったらいい。教育制度も学校も使い込めばいい。すでにそれをみなさんやっている、そここのところに私はすごく共感しているので、教育などという言葉は忘れたらいい、というのが私の大村さんへの答えです。

それからさきほどの企業の話でいえば、ケアをどのようにやっているか。三人集まれば文珠の知恵といいます、ほんとうに困っている人たちが集まって情報を共有化して、みんなで知恵を出し合ったら、解決策は絶対みつかるというのが、楽観主義者である私の答えです。でもなぜかみんな本音をさらけ出さない。だから問題の本質が見えてこない。したがって解決策も見えてこない。自分の問題として真剣に考えたら、企業なんていくらでもよくなる。業績だっていくらでもあがるはず。問題は問題が共有化されていないということにある。もし、ほんとうに自分たちの会社だと思えば、絶対よくするための知恵が出てくるはず。それから、このままいったらおかしいとか、こんな働き方でいいのだろうか、思っている人が動き出さないといけない。動き出すと何人かは傷つくんですね。でもそれは仕方がない。その人には運が悪いと思ってあきらめてもらうしかない。でもそれこそがもしかしらいい人生なのかもしれません。ともかく、誰かが動き出さないとにも変わらない。問題を共有したら、自然とケアしあうところというのは出てくるのではない、と思います。そのように自由に話し合う場というのが、いま企業のいろいろなところではじまってきている。そういう場を増やしていくことが重要だろうと思います。

それから半田さんの問題意識に関しては、私のケアというものに対する考え方が、やはり十分に届いていないと反省しました。ケアというのは相手に対して介助するとか介護するという一方的な上から見た行為、強い者が弱い者にとという面もあるのだけれども、そうではなくてお互いに気にしあうという部分が入っているわけです。私が今日とくにメッセージしたかったのは、一方向的でない双方向のケアがありますということ、しかも生まれながらにして私たちはそうしたケア・マインドをもっていきますということ、です。新大久保の例ではないですが、電車にひかれそうになった人がいたら、なにも考えずに飛び込んで助けようと

する、そういう私たちがもっている命に対する思いやり、気遣い、それをもう一度、私たちは取り戻したい。また、弱者者に何とか、という話はやめたいと思います。誰が弱いかわからない、みんながそれぞれ弱さをもっているのだから、強さを活かしながら弱さをかばいあうような、そういう関係を築いていくことが自分が輝いていくことになるのではないかと気がします。そういう意味で、双方向的なケアという概念、人間が本来もっていた気持ちを取り戻したいというのが、私の基本的なメッセージです。

みんなが輝くコミュニティの鍵は、いまお配りしたレジメをみていただきたいのですが、素直に生きましょう、ということ、それだけなんです。気持ちよく生きましょう、と。みんなが気持ちよく素直に生きたら、そしておかしいことがあったら、おかしいといいあう、おかしいことは拒絶する、そうしたらいい社会になるのでは、というのが、能天気といわれそうですが、私の今日のメッセージです。すべてそうでなくともいい。できることから、まず最初の小さな一歩を踏み出していったら、世の中ももっとよくなるのではないかと、思うのです。それがケアの視点からあたらしい社会を考えるとということで、私がいいたかったことです。

舌足らずでたいへん申し訳なかったのですが、このラウンドテーブルの企画者としては、いまお配りしたペーパーの下に私のメールアドレス(QZY00757@nifty.com)が入っておりますので、言い足りなかった点やご意見は、ぜひいただければ、うれしいです。きちんとお答えします。それからコムケアセンターのホームページにも、お時間がありましたら、ぜひのぞいてください。気楽に書き込んでいただければたいへんありがたいと思います。

時間を超過してしまいました、これでこのセッションを終えたいと思います。どうも長い時間、ありがとうございました。

(半田からのあとづけコメント 佐藤さんにもわたしの問題としていっているところがやはり十分に伝わっていないと感じました。わたしがケア社会ということに関連して問題の焦点にしているのは、上下ということを認めているとすれば、ケアにおける上からの視線ではなく、逆に下からの視線が

もつ権力の怖さです。佐藤さんはこのことばを使うと嫌うでしょうが、わかりやすくいえば、弱者というポジションのもつ強さとその強さゆえにそれを利用しようとする政治力が気になっているのです。

また、わたしたち人間が生まれながらにもっている相手を思いやるころ、という良心については、わたしも信じるころが大きいわけですが、このころは生来恥ずかしがり屋だから、あからさまに語られたり、語りあったりして陽光のもとに照らし出されることを好まないのではないかと、とも感じるのですが……。それと、電車に引かれそうになって飛び込む人の話ですが、それをケアの話として例示することについては、それこそ一方向的な見方ではなく、別の多様な観点からも論じあい、考え方の可能性をひろげておかないと、おもいやりや気遣いは息苦しいものになりそうな気がします)

(さらに佐藤修からのあとづけコメント 答になるかどうか不安ですが、私自身は中途半端さが問題の根源ではないかと思えます。いま、政治力が問題になるのは、情報の共有化が中途半端だからではないかと思えます。つまり外挿法的に考えると問題ばかりが見えてしまうのですが、行き着く先から考えると問題はほとんど簡単に見えてしまうように思えます。

また、「弱者というポジションのもつ強さ」という場合、その「弱者」と「強さ」の意味は何なのでしょう。「弱さ」が「強さ」になるのであれば、それは強さとか弱さではない、別の言葉で語るのがいいような気がします。つまり、強さとか弱さは基準によって反転しうるわけですから、一般論としては使えない言葉かもしれません。

このテーマはもう少し議論しあう必要がありそうですね)

大村 今回の学会では、みなさんにさまざまな問題提起と議論をしていただき、またたくさんの実践的な構想も発表されました。やがてこれらの構想が実現すれば、これまでわたしたちが議論してきた問題や課題が解決され、それらを議論しなくてもすむような社会を実現できるのではないかと希望をもつことができました。佐藤さんがおっしゃってくれた「教育ということばなど忘れ

てしまえ」ということばが、このことを象徴していると思います。これは今回の学会に参加して自分が得たことのうち、いちばんうれしかったことでした。

それでは終了時間がせまってまいりましたので、最後にもうひとりくらいどうぞ。

福永 わたしはここにいらっしゃる池川先生の元学生で、宮城大学の福永と申します。ひさしぶりに先生のお話を聞きました。自分がアセスメントしないと看護できないと思うような看護婦になってしまうところだったと、いま危機感を感じていたところですよ。大学で実習をするときなど、必ずアセスメントをして、根拠がないと手を出してはいけないと教育されていましたので、それではいけないかもしれないということ、あらためて学ぶことができました。

学びは双方向的でなければいけないと思ったの

で、最後に発言させてもらいました。すごく学ぶことが多くて、いまはうまく言葉にならなくて、自分のなかで消化するのに精一杯です。ほんとうに学ぶところが多かったと思います。このような場を企画し、提示していただいたことに感謝します。その気持ちが一杯になったので、話させていただきました。

また、新しい看護のあり方というものを構想しなくてはいけないと思いました。ケアというのは病院のなかだけではなく、診療院やセラピストのなかだけでもなくて、地域のなか、家庭のなか、あるいは自分の生き方のなかにあるものなのだというところを、今回のこのテーマであらためて考えさせてもらえました。看護が病院のなかに閉じてもっているのではなく、もっとあらたなあり方を構想していかなければならないということ、いち看護学生として感じました。ありがとうございました。

この版は日本構想学会機関誌『構想』掲載の文書から写真を抜いて制作された特別版です。

そのためページ番号の割り振りは的確ではありません。